

Wild Grass News

「第8回横浜トリエンナーレ」の魅力を、アート、デザイン、カルチャーの視点からお届けします。



オズギュル・カー《倒れた木》
2023年 ビデオ 撮影: Robert Apa

谷中安規《桜》(『少年画集』より)
1933年(1981年後編) 木版、手彩色

暗闇のなか、真っ白な木が倒れています。根っこは太くしっかりとして、縦横無尽に伸びています。幹は地面に横たわっており、ところどころ折れてやがて朽ちていくのでしうか。幹から別れた枝も細く頼りなく、空中を漂っています。幹や枝の近くには、ハエが飛んでいて、死を暗示しているかのようです。長さ7メートルにおよぶモニターに映し出される、実物大の倒れた木は、細長い箱に閉じ込められているようにも見えます。アニメーションを手がけている作者の作品には、生と死、喜びや悲しみを物語るようなキャラクターがたびたび登場します。

中央に、赤い旗が掲げられたポールが見えます。ポールには、連続旗も飾られていて、ざわついた感じがします。左側には大きな窓があるひとまの建物、右側には大きな屋根と仏壇が連なっています。右上には飛行船らしきものが浮かび、そのすぐ近くに自転車を乗った人がいて、それぞれどこかへ向かって進んでいるようです。あたり一面に薄紅色の桜が広がって、春の陽気が感じられます。作者は、少年時代を日本と朝鮮で過ごしました。その頃の思い出を振り返りながら、様々な場面を表現した木版画を制作しました。

SIDE CORE インタビュー

参加作家SIDE COREの仕事を訪ね、お話をうかがいました。出品作品について教えてください。

高須 私たちの作品は、全て無料で見ることが出来ます。横浜美術館では外壁を使い、描きこみ消すといった行為に焦点を当て、会期中、壁が変わっていく作品を考えています。

松本 アートを見るために訪れた人だけじゃなく、その辺で仕事をしていたり、観光したり、歩いていくうちに、都市や街は変わっていく。自然環境が変化していくように、都市や街は変わっていく。それを高速で見せていく感じかな。

一人ではなくグループアーティストコレクティブで活動するのはなぜですか？

高須 アーティストとして一人で活動しても、協力し合い助け合ってくれる人がいる。それをもう少し目に見える形で、コレクティブと言っているところがあります。

松本 パースとして僕たち三人がいて、さらに広がっている感じがしていい。誰がどういうポジションになるか毎回わからない。高須 役割を持たないことは重要です。組織になる前の一番小

岡崎真理子 インタビュー

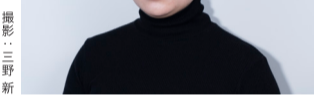
第8回横浜トリエンナーレのロコやメイジンビジュアルを手がけたグラフィックデザイナーの岡崎真理子さんの仕事場を訪ね、お話をうかがいました。

ロコやメイジンにはどのような意図があるのでしょうか？

岡崎 今回の横浜トリエンナーレのテーマは『野草』からとられています。野草はささやかなけれど、今この状況にあって、人々の心の底に潜んでいる。野草は生命力がある存在として描かれ、強い力に抵抗する一人ひとりの人間の存在も表しています。文字の歴史を調べると、文字というものは、人がつくり出したものを市民に配布する構造が多い。一方、人々が生活の中で自由につくってきた文字も存在します。それはテーマの野草と重なると考え、色々な人に書き添えて書いてもらって、色々な人に見てもらう。大きな字を集めて、それが大きな文字のつくった文字に挑んでいくような、変化の過程を見せます。

良い「翻訳者」になりたい

意味や生命力がある存在として描かれ、強い力に抵抗する一人ひとりの人間の存在も表しています。文字の歴史を調べると、文字というものは、人がつくり出したものを市民に配布する構造が多い。一方、人々が生活の中で自由につくってきた文字も存在します。それはテーマの野草と重なると考え、色々な人に書き添えて書いてもらって、色々な人に見てもらう。大きな字を集めて、それが大きな文字のつくった文字に挑んでいくような、変化の過程を見せます。



岡崎真理子 おかざき まり
1984年生まれ、東京都出身。2022年 REFLECTA, Inc. 設立。現代美術やファッション、建築、アート、デザイン等の文化領域に深くコミットし、観察とコンセプトを軸とした、編集的/構築的なデザインを追求している。

ストリートとアートをつなぐ

10代の頃は何に関心がありましたか？

高須 ファッションとか、スケートボードが好きで興味がありました。

松本 僕は横須賀生まれで、壁の落書きやグラフィティ、スケーターボードとかアメリカの文化に触れて育ちました。

高須 高校生の時に、ジャパレゲと

ピッパ・ガナー《ヒトの原型》

大きな展覧会では、本のように章を設けてテーマをより深く紹介することが多く、今回の横浜トリエンナーレは全7章で構成されています。そのうち「いま、ここで生きる」(1)、「流れと岩」(2)、「鏡との対話」(3)の章から4作品を紹介いたします。会場では、テーマ、章、作品の関係性も読み解いてみてください。



ピッパ・ガナー 《ヒトの原型》
2020年 ミクスメディア 撮影: Bernd Reitz
ひとつの身体がたくましく伸びて、長い金髪の女性らしき顔。黒い肌色の男の子の顔や手などが伸びています。長い髪は肩から下まで伸び、たぐい手、カートの髪型を模った髪型。スマフォやスマートフォンを持ち上げる手も伸びています。様々な性別、年齢、肌の色が伸びることによって押し入れられたような、それぞれの個性は交わることなく、手足もバラバラの方向を向いています。ほぼ等身大ですが、顔の表情や質感からは、子どもの人形遊びにも想像がふくらみませんか？ 作者は、1990年代に興る女性へ移行した経験を持っています。

ヨアル・ナング インタビュー

参加作家のヨアル・ナングさんが来日し、横浜トリエンナーレのテーマについてお話をうかがいました。

どのタイミングで「いま、ここで生きる」と感じましたか？

ヨアル 私がつくり始めたものが、自分の力ではコントロールできなくなると感じた瞬間に、自分が生きているんだと実感します。素材や文脈に向き合っていると、創造力が湧いてきて、自分の置かれた状況を意識し始めます。それが私や自身の創造力よりも大きくなり始めたときに、私の中に活力がみなぎってきこころの環境について調べていくと、違いを越えて、普遍的とも言えるような多くの類似点が見えてくるのでした。



Joar NANGO ヨアル・ナング
1979年アルタ(ノルウェー)生まれ、ロムサノ/トロムソを拠点に活動。北欧とロシア北部を移動するトナカイ遊牧民「サーミ族」の血筋をひく。地域内の資源循環に関心をもち、現地の素材をとり入れた仮設の構築物をつくる。

高校生における「日々を生きるための手引集」

アーティスト・ディレクターの二人は、「日々を生きるための手引集」として、10組のアーティストや思想家、社会活動家たちによる、生きるヒントとなるテキストを選出しました。それを踏まえ、横浜トリエンナーレに関わるディレクターや芸芸員が、高校生にぜひ読んでほしい本を選びました。

ヨアル・ナング インタビュー

参加作家のヨアル・ナングさんが来日し、横浜トリエンナーレのテーマについてお話をうかがいました。

どのタイミングで「いま、ここで生きる」と感じましたか？

ヨアル 私がつくり始めたものが、自分の力ではコントロールできなくなると感じた瞬間に、自分が生きているんだと実感します。素材や文脈に向き合っていると、創造力が湧いてきて、自分の置かれた状況を意識し始めます。それが私や自身の創造力よりも大きくなり始めたときに、私の中に活力がみなぎってきこころの環境について調べていくと、違いを越えて、普遍的とも言えるような多くの類似点が見えてくるのでした。

社会との関わり方を提案する

10代の頃は何に関心を持ち、どんなことをしていましたか？

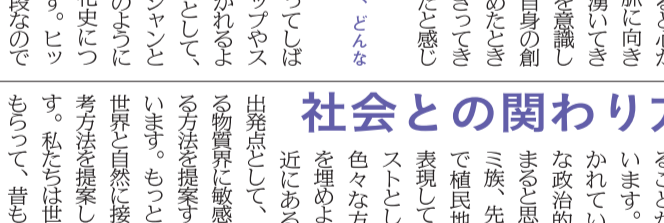
ヨアル エンジンやバイクにハマって、そこからグラフィックデザインやファッションに興味を持ちました。グラフィックデザインやファッションに興味を持ちました。グラフィックデザインやファッションに興味を持ちました。



Joar NANGO ヨアル・ナング
1979年アルタ(ノルウェー)生まれ、ロムサノ/トロムソを拠点に活動。北欧とロシア北部を移動するトナカイ遊牧民「サーミ族」の血筋をひく。地域内の資源循環に関心をもち、現地の素材をとり入れた仮設の構築物をつくる。

『桐島、部活をやめるってよ』

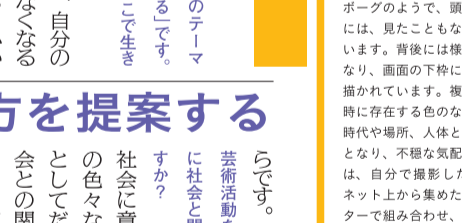
桐島、部活をやめるってよ。これはきっかけに5人の高校生の心に生まれる嫉妬やあこがれ、むなしさや幸福感。語られるのは半径10メートルの出来事だけで、どの子にも社会や世界について考える余裕なんてない。ただ生きることにリアルってこの小さな必死さの中にあつたよな、って思っています。



『桐島、部活をやめるってよ』
朝井リョウ 著 集英社文庫
本は、目の前の世界だけじゃ現実じゃないっておしえてくれる。

漫画『風の谷のナウシカ』(全7巻)

この物語のクライマックスで主人公ナウシカは、旧世界の亡霊たちと「人間はどのように生きていくべきか」について論争します。汚染された海と大地、憎しみと紛争の絶えない世界に救いはあるのか。絶望的な状況で「いまを生きる術」を考え続けるナウシカの結論は、今回のトリエンナーレが出発点とする魯迅の精神と重なります。



『風の谷のナウシカ』(全7巻)
宮崎 駿 著 徳間書店

『野草』

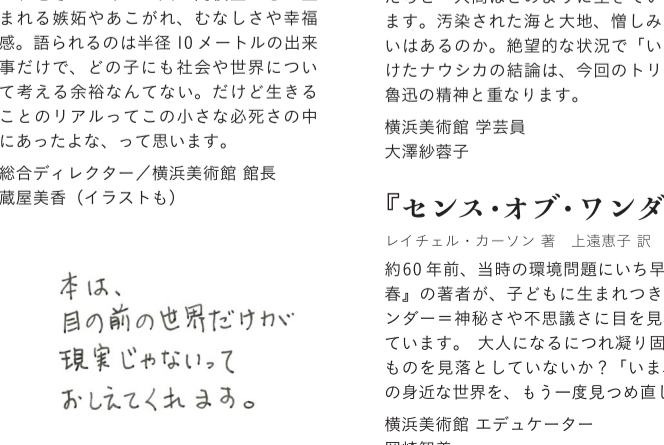
魯迅が『野草』を執筆したのは社会が激しく揺れ動いていた1924年から1926年の間で、魯迅の人生においても困難な時期でした。その頃には、魯迅が私生活と社会生活を通して抱えていた悲しみや苦味が積み重なり、心の中に重たくのしかかっていた。そして間もなく、魯迅は「希望」ではなく「絶望」を彼の人生、仕事、そして思想の起点として捉えはじめます。もはや希望や野心は存在せず、暗黒、一寸先も見えない闇しかないという事実を全面的に受け入れ、それと同時に、完全な闇の中に出口を見出すことに全身全霊を捧げるようになったのです。盲目的な楽観主義ではなく、絶望から始まるこうした考え方は、今日を生きる私たちが、自信を持って、あらゆる頑強な障壁を打ち破っていくために必要な、深い洞察力を与えてくれます。

『センス・オブ・ワンダー』

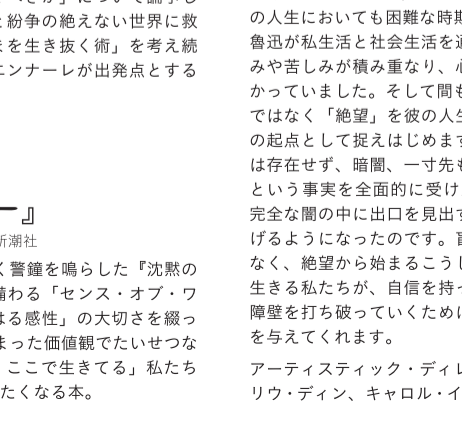
レイチェル・カーソン 著 上遠恵子 訳 新潮社
約60年前、当時の環境問題にいち早く警鐘を鳴らした『沈黙の春』の著者が、子どもにも生まれつき備わる「センス・オブ・ワンダー」=神秘さや不思議さに見る感性の大切さを綴っています。大人になるにつれ凝り固まった価値観を洗い直すものを見落としていないか？「いま、ここで生きる」私たちの身近な世界を、もう一度見つめ直したくなる本。



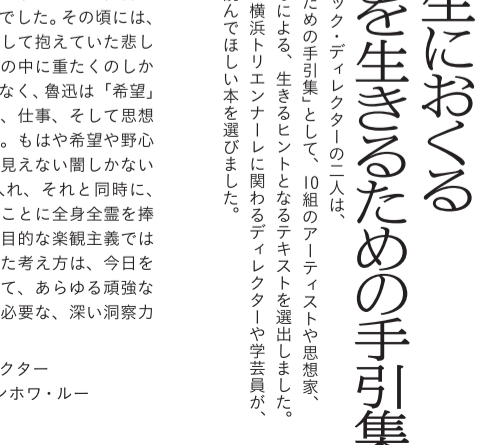
『桐島、部活をやめるってよ』
朝井リョウ 著 集英社文庫



『野草』
魯迅 著



『センス・オブ・ワンダー』
レイチェル・カーソン 著 上遠恵子 訳 新潮社



『風の谷のナウシカ』(全7巻)
宮崎 駿 著 徳間書店